[dõ:k]

DONC どんく

発行

三重日仏協会

SOCIÉTÉ FRANCO-JAPONAISE DE MIE

事務局 鈴西夏丸之内21-4 オーデンビル

3F／ Siege : Oden Building 21-4 Higashi-Marunouchi Tsu JAPON ☎0592 (26) 3159

N°013 le 7 Juillet 1990 SOCIETE FRANCO-JAPONAISE DE MIE

ベレ総領事と武田会長（三重県庁で）

「日仏協会の活躍に期待」

1990年度総会　ルネ・ベレ総領事が記念講演

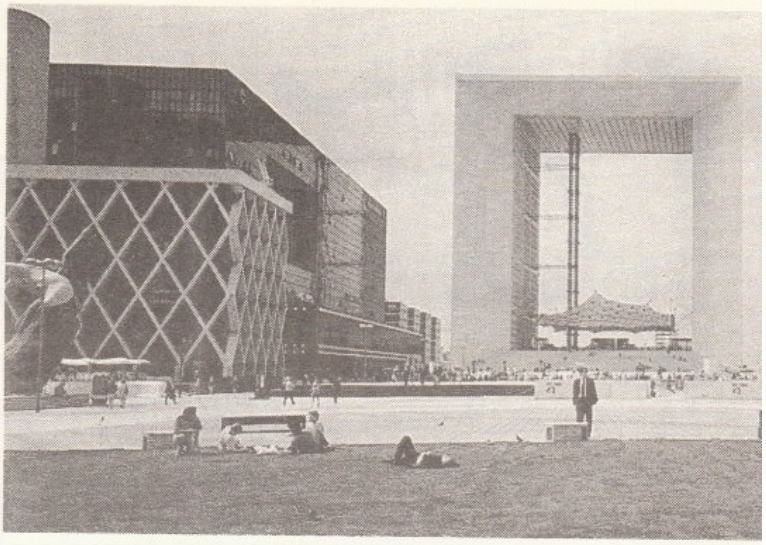
三重日仏協会１９９０年度総会が、５月１３日津市の「茂波」５Ｆラウンジで開催され、９０年度事業計画などを原案通り議決しました。

議事のあと、来賓として列席されたフランス総領事ルネ・ベレさんが講演され、日本とフランスの外交関係の歴史について興味ぶかいお話をうかがいました（４面に関連記事）。また総領事館の担当区域は日本の西半分ときわめて広く、人員も少ないこともあって、各地の日仏協会の存在に助けられる部分が多いと語られました。

このあとレセプションに入りましたが、過去最高の５０人以上が（大阪、名古屋、熊野からも）参加、ベレさんを囲んで歓談しました。

ベレさんは翌１４日、武田会長らとともに津市長、同商工会議所会頭、三重県知事を表敬訪問されました。

会員のページ



グラン・アルシュの秘密

ますますフランスに魅せられて

山田　紀美

以前、本屋で見つけた本に、フランスのグラン・プロジェによってつくられた新名所の数々を紹介するものがあった。その中で、ラ・デファンス地区の象徴として建てられたグラン・アルシュ（新凱旋門）については、とても興味深かったが、つい先日実際に訪れる機会をもったので、その印象を交えてここで皆様に紹介したい。

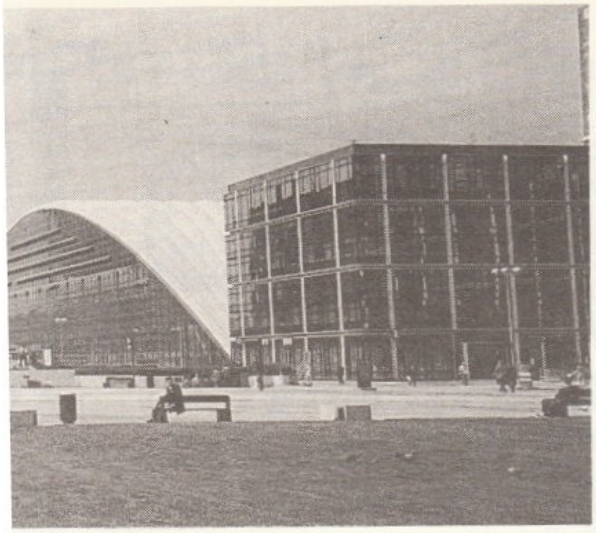
ラ・デファンス地区はパリの地図でいうと左上の隅にあたり、観光地図ではほとんど割愛されている新都市で、私たちに馴染みの深い旧市街から見ると、まるで蜃気楼のように広がっている。その中心にそびえ立つのがグラン・アルシュで、それ自体が高度なビジネスビルだ。

このグラン・アルシュは、ルーブル宮殿を起点にエトワールの凱旋門まで延びた都市軸の延長線上にあり、ルーブルのカルーゼル凱旋門を含めて、三つの凱旋門が同じ線上に重なっていることになる。ところがパリのエスプリは、そんなことだけではなかった。グラン・アルシュは二つの秘密をもって建てられているのだ…「１０５ｍ」と「６度」の秘密。

１０５ｍは、立方体であるグラン・アルシュの一辺の長さで、これは旧凱旋門５０ｍのほぼ倍だが、それにしては半端な数字。実はルーブル宮中庭の一つクール・カレ（方形宮）の一辺の長さなのだ（わが百五銀行とは関係なかったようだ）。

そして「６度」…グラン・アルシュは、旧凱旋門から見ると肉眼でもはっきりと左に顔（面）をふっているのがわかる。先に述べた都市軸からすれば

会費納入をお早目に　滞納の方も とりあえず 今年度分3,000円を！



角度にして6度ということだ。実はこのぶれはルーブルに起因している。ルーブルはもともとセーヌ川に添って建てられたので、その中心軸は都市軸から6度ぶれたところにある。それに合わせた角度だったわけ。

旧凱旋門の形態をもち、ルーブル宮のスケールをもつことで、グラン・アルシュは歴史に敬意をはらいながら建つ。こうしてパリにおける新と旧は、たもとを分かつことなく、都市軸…シャンゼリゼによってつながるのだ。

私は、グラン・アルシュを通し、過去の栄光にすがるのでなく、歴史の上に成り立つ新しい都市の姿を見た。日本人として半分驚異を感じながらも、ますますフランスという国に魅せられそうであり、またそれを期待しているのである。

＜編集部注＞

「アルシュ・サミット」でもおなじみのパリ新凱旋門を『つい先日訪れる機会をも』ったと、さりげない紀行文を寄せてくれた山田紀美さんは、旧姓赤羽さん。去る5月12日結婚されたばかりで、パリ訪問も実は新婚旅行でした。

連載　フランスなまかじり　(2)

THIÉVAIN

臨終のことば

落語「二十四孝」の親たちは、いまわのきわに「筍が食べたい」とか「鯉を食べたい」とかいう。もっとも、これはいずれも積雪、結氷の寒中のことであり、これをさがしもとめる孝子の努力が天の感ずるところとなって願いがかなう、というだけの日時が残されているわけだから、ほんとうの「いまわのきわ」とはいいにくい。

一方、歴史上のいわゆる偉人たちの最期のことばも多く伝えられているが、偉人の知識、思想、人格などはこちらとはほど遠いので、その真意もくみとれず、「いわずもがな」の感を抱かせるのが少くない。

そこへゆくと、Thiévain というフランス語学者の臨終のことばはりっぱなものだ。

Mes amis, je m'en vais, ou je m'en vas, puisque l'un et l'autre se dit ou se disent.

「私はもう死ぬよ」というだけで、faire le pédant の要素はまったくない。ただ当時 s'en aller の一人称単数の正しい活用が二通りある以上、両方をいい、しかも l'un et l'autre が動詞の単、複、両形をとりうるので、これも二通りにいいつくした。つねに正しいことばに執念をもった学者として、「私は死ぬ」の一言のためにも苦しい息の下でこれだけはいわねばならなかった壮烈な最期である。

「当時」と書いたが、この Thiévain なる学者がいつごろの人で、どんな人なのかすっかり忘れてしまった。むかし聞きかじっただけの無責任な話である。

(OURS)

EXTRAIT

中日新聞 5.18 夕刊より

三重県を訪れたフランス総領事 ルネ・ベレさん

事実見据え友好を

和食党で、出勤は朝7時

フランス総領事のルネ・ベレさん(四四)がこのほど、津市内で「日仏交流の歴史」をテーマに講演した。ベレさんは二年前に大阪市内にある大阪・神戸総領事館に赴任、三重日仏協会（会長・武田進三重大学学長）の招きで初めて三重県を訪れた。

「日仏交流が始まったのはやっと幕末からです。その期間は百年余り、それが長いか短いか意見は分かれるでしょうが、私はわずか百年にすぎない、と思ってます」

これまでの交流史は、一九二四年、詩人でもあった駐日大使ポール・クローデル（彫刻家カミーユ・クローデルの弟）の努力で東京に日仏会館が開設された事実から話を始めるのが普通であったが、ベレさんは一八四四年のアルクメーヌ号の琉球来航、そして幕末から明治に移行する混乱期に生じた堺事件（一八六八年）から始めた。

この事件、フランス軍艦デュプレー号が入港、フランス水兵らが上陸して市内を歩き回ったことから、規制に出た土佐藩の警備隊と銃火を交え、水兵十一人が死亡した。公使ロッシュは新政府に厳重抗議、土佐藩の隊長以下二十人が切腹を命じられたが、フランス側の配慮で実際に切腹したのは十一人だった。

「堺事件は日仏関係の暗い過去であり、あまり取り上げられません。その後、神戸に領事館が開設されるわけで歴史的には重要な出来事です」

事実はしっかり見据え、そこから本当の友好を築こうというのが彼女の考え。赴任前は外務省の仕事以外に国立行政学院、国立東洋語学校でも日本の外交、文化を教えていた日本通。愛知、岐阜から沖縄まで西日本全域を担当し「バカンスは取ったことがない。朝は七時に自宅（神戸）を出る」というモーレツ外交官。和食党でライフスタイルは日本人的。フランスでも女性外交官はまだ少ないという。その中で「男には負けられない」という気持ちがそうさせるのかも。雑誌記者の夫はフランスにいる。「日本は好き。仕事は大切だが単身赴任はやむを得ずです」と話す。（善）

6.20『広報すずか』より

ル・マン市と友好協力協定を締結

フランス、ル・マン市のロベール・ジャリー市長ら視察団一行16人が 5月17日から30日まで鈴鹿市を訪問しました。27日には「友好協力協定書」の調印式が市議会議場で行われ、衣斐市長とジャリー市長が３項目からなる協定書にサインし握手を交わして幅広い交流を続けていくことを誓い合いました。（…）

＜三重日仏協会からも武田会長以下多数が、歓迎レセプションなどに招かれて参加し、両市民の交流に役割を果たしました。＞

INFORMATION

夏期速修フランス語合宿 （日仏文化協会主催）

（場所）信州志賀高原

（期間）1. 7月29日～8月4日　2. 8月5日～8月11日　3. 8月12日～8月18日

4. 8月19日～8月25日　のいずれか６泊７日

（講座）入門から中級まで３段階クラス編成、月～金25時間

（費用）64,800円 （宿泊費、食費、受講料含む）

＊詳細は事務局に資料があります。